

昨今の大学事情

棚橋 一郎

大阪工業大学 工学部 教授
連絡先 tanahashi@chem.oit.ac.jp



私が企業から私立大学へ転職して今年で13年目になります。大学に移った頃は、基礎に立ち戻り自分で納得できる教育・研究により、将来を担う優秀な人材を育てたいという目標がありました。ところが、現実には厳しく、落ち着いて研究する時間的な余裕はありませんし、卒業生や企業の方々から、「大学での教育はどうなっているのか。優秀な人材を育ててもらわないと困る。」という耳の痛いお話を伺います。今回は、大きく変貌している大学の現状について紹介し、ご意見を頂ければと思い巻頭言を書かせて頂きました。

現在の日本には大学が約780校あり、その中で私立大学が80%近い約600校を占めています。1985年には460校であったことから、この30年弱で1.7倍になっています。一方、18歳人口は1981～1990年では150～200万人であったのに対し、ここ数年は120万人前後で推移し、この間で20～40%減少しています。さらに、18歳人口は2018年から再び減少に転じ、2024年には106万人になります。従って、2018年からの7年間で約10万人以上少なくなり、この20年で進学率が36%から50%に増加していますがさらに進学率が上昇しない限り、入学者が5万人減ります。これは1000人規模の大学が数の上では50校要らなくなることに匹敵します。このような問題を大学関係者の間では「2018年問題」と呼び、各大学とも生き残りをかけて色々な対策を立てて必死に頑張っています。それでも2020年代に入ると、経営が成り立たない大学が増加し、大学の統廃合が進むのではないかと思います。

人口の減少はこのように教育にも大きな影響を与えます。人口が少なくなるとリーダーになる素質を持つ人材の絶対数も少なくなり、大学生と大学教員の「質」も低下してきます。従って、世界の名門大学と伍して競合できる一部の研究型大学以外は、教育と経営の両面において極めて厳しい状況に追い込まれることとなります。国際競争に勝てる優秀な人材を育成できる大学が求められています。

これまでに大学では、入試制度やカリキュラムの見直しなど様々な改革が行われてきました。現在も秋入学や4学期制などが議論され、一部の大学で実施されています。しかし、激しい時代の変化、国際化、あるいは規制の壁などに対応できていないのが現実です。文部科学省中央教育審議会の答申「我が国の高等教育の将来像」では、21世紀は「知識基盤社会」(knowledge-based society)の時代であり、高等教育において、先見性・創造性・独創性に富み卓越した人材を輩出することが大きな責務であると書かれています。現実とは大きな乖離を感じざるを得ません。

教育は日本の最優先課題であり、今、社会全体で大きな方向性を示さないと手遅れになると危惧されています。シンガポールのように、英語、道徳、エリート教育に徹して教育改革が進んだ国もあります。成功例を参考にして、日本に適した大学改革が求められています。微力ながら私も人材育成に努力しますが、これからの大学教育についてアイデアやご意見をお持ちでしたらお聞かせ願えれば幸いです。